PROJECT

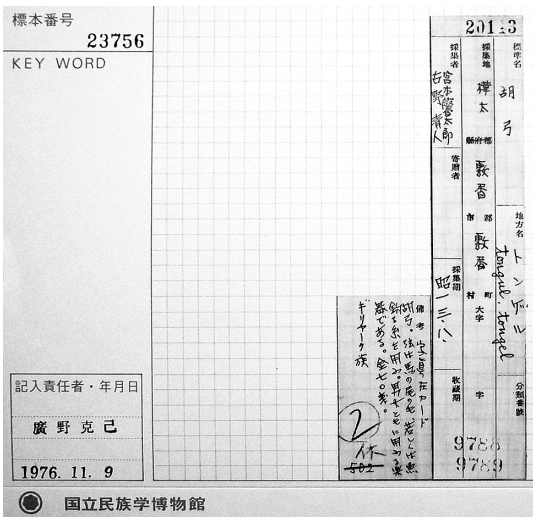
日本民族学会附属民族学博物館の収集資料

文
齋藤玲子

共同研究 ● 明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動
──国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料の再検討（2012-2015）

本共同研究では、国立民族学博物館（以下、民博）が所蔵する北海道、樺太、千島の民族資料のうち、第二次世界大戦終戦までに収集されたものを中心に、収集者・収集地・年代・使用民族・原所蔵者などの情報を再検討し、修正・追加するとともに、人類学または民族学者と被調査者・資料提供者との関係といった、資料が集められた当時の研究状況と社会的な背景を明らかにしようとするものである。該当する資料のなかでも、日本民族学会附属民族学博物館（以下、学会附属博物館）の旧蔵資料には、北海道および樺太で収集されたものが約800点あり、大きな割合を占めている。

共同研究2年目の2013年度は、民博で秋に開催された特別展「渋沢敬三記念事業 Attic Museum 屋根裏部屋の博物館」に向け、学会附属博物館の資料データを再検討するために調査をおこない、その調査の過程で、いくつかの大きな成果が得られた。本稿では、この学会附属博物館の樺太および北海道の民族資料を中心に、民博に移管後の資料の登録状況と、新たにわかった情報について紹介したい。



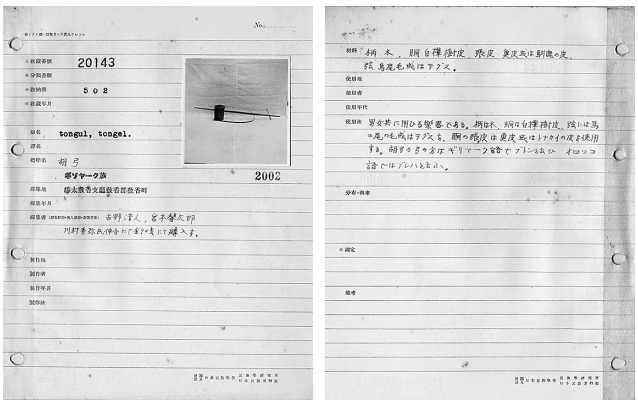


写真1　上：情報カードに貼付された「民具標本収蔵原簿」のコピー。
写真2　下：学会附属博物館の資料カード。宮本記念財団所蔵。

移管を重ねた資料

はじめに、学会附属博物館の資料について、概略を記しておこう。日本民族学会が1934年に設立されると、1937年には保谷村（現・西東京市）に学会附属民族学研究所および同附属博物館が設置され、渋沢敬三が主宰したアチック・ミューゼアムの資料は学会に寄贈されて、同館所蔵となった。

同研究所の活動開始直後には、当時日本の統治下にあった台湾、朝鮮半島、樺太、ミクロネシアなどで民族学的な調査がおこなわれ、収集された多数の生活用具や儀礼具などが同館に収められた。戦後も国内外で収集が続けられ、同館が閉鎖された1962年には、標本資料（写真等をのぞく実物の民具資料）はおよそ21,000点にのぼっていた。これらの資料は、いずれ国立の民族学博物館が設置されればそこに移管するという条件で国に寄付され、旧文部省史料館で保管された。

民博創設の翌1975年、これらの資料が日本万国博覧会時に保税倉庫として使われていた倉庫に運び込まれた。研究会では、当時、資料の受け入れにあたった宇野文男（元福井大学教授・元本館情報管理施設情報企画課専門官）を特別講師に招き、どのように資料の整理・登録がおこなわれたかを話してもらった。

学会附属博物館には基本台帳ともいうべき「民具標本収蔵原簿（以降、原簿）」があり、75年当時は民族学振興会が所蔵していた。民博ではこれを借用してコピーをとり、新たに用意した「情報カード」に貼付した（写真1）。また、学会附属博物館から旧文部省史料館への寄附の際に作成された「民俗標本資料目録」のコピーを作業台帳とし、標本資料に書かれていた番号（または添付された番号札）を照合して、約17,000点を確認した。しかし、移管は複数回にわたったため番号札やラベルの剥離、資料の欠損などがあり、同定できなかった資料も約4,000点あった。これら未登録になっていた資料は、2001年度から同定・確認作業が始められ、現在も続けられている。

宮本馨太郎の残した記録

2013年の春、上述の特別展実行委員であった宮本瑞夫氏（財団法人宮本記念財団理事長）がご尊父の宮本馨太郎氏（以下、敬称略）が残した北海道・樺太に関する調査の写真および民族資料のカードを、委員会に持参された。筆者は共同研究のメンバーで同展実行委員長であった近藤雅樹（故人・国立民族学博物館教授）に、これらの写真やカードは民博にはないことを確認し、すぐさま借用して、複写をした。それらは1938年の樺太での調査・収集と、戦後の北海道アイヌの調査に関するものとのふたつに大きく分けられる。

宮本馨太郎（1911–1979）は、1929年ころからアチック・ミューゼアムの同人となり、国内外の各地で民俗学／民族学の調査研究をおこなった。とくにフィールドでは、精力的に民具を収集し、写真・動画による貴重な映像記録を多く残した。戦後は文化財保護法や博物館法の制定に寄与し、日本の民具研究や博物館学の先導的役割を果たした研究者である。1937年に学会附属民族学研究所が設置されると同時に同研究所の研究員となり、同附属博物館の資料整理・管理をはじめ、

博物館運営初期の中心的存在であった。

宮本は、1938 年に古野清人（当時・学会主事）らとともに、学会が派遣した第 2 回北方文化調査・民族学班の一員として樺太に赴き、ウイルタ（当時はオロッコと呼ばれた）とニヴフ（同じくギリヤーク）および樺太アイヌの民具の収集をおこなった。宮本は 1958 年の『民族学研究』22（1-2）に「オロッコ・ギリヤークの衣食住」として、この調査の報告を寄せている。

現在、宮本・古野の収集品として民博の標本資料詳細情報データベースに登録されている資料は、ウイルタまたはニヴフの資料が約 70 点、アイヌ資料が約 100 点ある。そこには、民博の情報カードに貼られた原簿のコピーにある記載をもとに、「標本名」欄には「標準名」、「現地名」欄には「地方名」、以下、採集地、採集者である両者の名前、採集時期（すなわち 1938 年 8 月）、備考などが登録されている。

筆者は、情報カードに貼られた原簿より詳しいカード類の存在を把握していなかったが、宮本記念財団に保管されていた資料カードには、さらに詳細な情報が記載されていた（写真 2）。この資料カードは右下に「財團法人日本民族學会　民族學研究所　日本民族博物館」と印刷されており、資料に関する次の項目を記入する欄が設けてある。表の面に「収蔵番号」「分類番号」「収納棚」「収蔵年月」「原名」（現地呼称のこと／筆者注）「訳名」「標準名」「採集地」「採集年月」「採集者（採集経路・購入価格・寄贈者等）」「製作地」「製作者」「製作年月」「製作法」、裏面は「材料」「使用地」「使用者」「使用年代」「使用法」「分布・由来」「測定」「備考」となっている。表の右上には写真が貼付され、写真番号と思われる数字がふられている。これらの項目は、民具の資料カードとしてほぼ完ぺきなものといえるが、日本の民俗資料を想定していたためか、「民族名」の項はなく、「標準名」と「採集地」の間の罫に民族名が記載されていた。また、すべての欄が埋まっているわけではないが、材料や使用法などの項目では数行にわたる記述のあるものも見られた。このように宮本記念財団にあったカードに書かれていながら、原簿ではその記入スペースの狭さからか、落ちている内容もかなりあった。

今回、我々が注目した情報の 1 つは収集経路で、ウイルタとニヴフの資料の大部分は、「川村秀弥氏の仲介で」「購入」したものだったことである。上述の『民族学研究』での報告にもウイルタのインフォーマントの名前とともに「川村秀弥夫妻のご教示による」と書かれていたが、川村は購入の際の仲介役だったことが明確になった。川村秀弥は、敷香町（現ポロナイスク）につくられたウイルタやニヴフの集住地「オタス」の教育所の教師であった。夫人の川村なおも「おんな先生」と親しまれていた。収集品のうち衣服数点は、「夫人の仲介」と記載されている。

今後は、購入価格が当時の樺太の物価と比較してどう評価できるか、調べてみたいと考えている。また、大部分の資料に現地での呼称がローマ字またはカナで表記されている。それらを、ウイルタ語、ニヴフ語を専門とする共同研究員により言語学的な視点で分析することを予定している。

一方、この 1938 年の調査時には樺太アイヌの民具約 100 点も収集されたが、宮本記念財団に残されているアイヌ資料の情報は、写真 2 と同じカードで収蔵番号と写真が貼付されただけのものが 19 枚と、図書館の目録カードほどの大きさのものが 15 枚のみである。原簿には、資料の現地呼称や収集した集落名まで記載されているので、これらのカードは整理途中だったのかもしれない。宮本瑞夫氏いわく、「親父は 2 部つくって、1 つは博物館に、1 つは手元に置いていたはず」とのことであるので、もう 1 冊のカードの所在確認を進めたい。

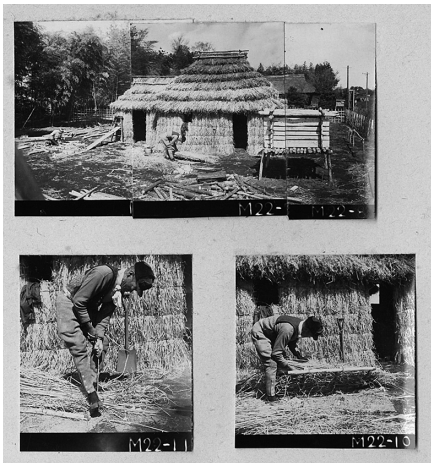


写真 3　チセの外観と外壁を葺く作業の様子。宮本記念財団所蔵。

アイヌ家屋の野外展示

次は戦後に宮本が残したアルバムのなかでも最も写真数の多い、アイヌ家屋の建築について紹介する（写真 3）。学会附属博物館の設立当初から、その敷地内に野外展示をおこなう構想があった。しかし、第二次世界大戦中は計画が休止し、戦後にアイヌ家屋の建設から計画が再開された。

建築を依頼されたのは、平取町二風谷の二谷国松・市太郎・善之助の兄弟だった。1950 年 3 月に二谷らが上京、地鎮祭に始まり、10 日ほどで母屋（アイヌ語でチセ）とその周囲に熊檻（くまおり）、祭壇、倉、男女の便所が造られ、3 月 25 日には新築祝いの儀式「チセノミ」が執りおこなわれた。建築過程や儀式の様子は、博物館関係者らによって撮影・記録されるとともに、知里真志保（当時・北海道大学法文学部講師）がチセとその儀礼に関する聞き取り調査をおこなった。1950 年の『民族学研究』14（4）に、宮本が「アイヌ住家の建設について」としてその経緯を、知里が「アイヌ住居に関する若干の考察」を寄せている。建物は残されていないが、建築材料の一部や儀礼具など 100 点あまりが民博に移管されている。

宮本記念財団所蔵のアルバムには、記録写真が約 280 枚残っており、これらの一部は、民博にも所蔵されていることがわかった。また、知里のノートは北海道立文学館に所蔵されている。昨年の研究会では、北原次郎太（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）が「保谷のチセ建設及びチセノミ（落成式）関連資料」と題する発表をおこない、残された実物資料、写真、聞き書き記録の特徴を明らかにし、欠落部分はあるものの、これらを総合すると、建築およびその儀礼と言語についての数少ない貴重な研究資料である、と指摘した。

紙幅の関係で、このほかの研究発表について触れることはできなかったが、引き続き収集の経緯や資料情報の掘り起こしを進めてゆきたい。

さいとう れいこ

国立民族学博物館民族文化研究部助教。専門は世界の北方地域先住民の文化人類学。アイヌ民族をはじめアラスカやカナダの先住民の物質文化および工芸・観光について比較研究をおこなっている。著作に「極北地域における毛皮革の利用と技術」北海道立北方民族博物館編『環北太平洋の環境と文化』（北海道大学出版会 2006）、大村敬一・岸上伸啓と共編『極北と森林の記憶 イヌイットと北西海岸インディアンの版画』（昭和堂 2010）など。